

高尾山報

令和3年4月号



火を渡りたる新貫首 山開き



成田山光輪閣においてしめやかに通夜式が営まれました

大本山成田山新勝寺中興第二十一世貫首 橋本照総大僧正御遷化

真言宗智山派大本山成田山新勝寺・中興第二十一世貫首・橋本照総大僧正御下が、二月十八日に御遷化されました。

二月二十六日、成田山光輪閣に於いて当山佐藤山主御導師のもと通夜式がしめやかに営まれました。翌、二十七日、大本山川崎大師平間寺御貫首藤田隆乗親下の大導師のもと密葬儀が執り行われ、新勝寺寺務長岸田照泰僧正をはじめ御遺弟、成田山法類法縁各位、ならびにご遺族ご信徒がご参列され深い哀しみの中で追悼の祈りが凝らされました。三月十三日には、成田山新勝寺後任住職として岸田照泰寺務長が選定を受けられました。

もし賢い思いを巡らせ、十方の仏(あらゆる世界の無数の仏さま)に行き渡らせるならば、「華嚴經」の中の「衆の雑花を散ずること十方に遍く、一切の諸如来を供養せよ」(多くの色とりどりの花を、あらゆる方向に散らして、全ての仏さまを供養しなさい)という偈(韻文のお経)をお唱えなさ

法の水荃
—和歌とおはなしでひもとく仏教—
高橋秀城 著
武蔵野書院 3,500円(税別)

書籍紹介

このたび、大正大学講師の高橋秀城先生が、高尾山報に平成二十四年七月号から連載されております、「法の水荃」が令和二年十月号で白回の連載を迎えたことを記念し、百話分の連載に加筆編集をして、出版されました。

法の水荃

大正大学講師 高橋秀城 (106)

春風の
花を散らすと
見る夢は
覚めても胸の
騒ぐなりけり

(西行「山家集」)

(春風が花を散らしている夢は、目覚めてからも胸の騒ぎが治まらない)心地よい春風も、桜にとつては、散り際を知らせる合図となります。夢から目覚めての胸騒ぎは現実の満開の桜を眺めて治まったでしょうか。あるいは、花びらは夢のようにハラハラと風に舞っていたのでしょうか。実感することはありませんが、春は確実に過ぎていきます。日本列島を北上している桜前線は、聞くところによると時速一キロほどで進んでいるとか。今は、どの辺りの野山を薄紅色に染めていたでしょうか。

四月八日は、お釈迦様が生まれになった日です。この日行われる降誕会(花祭り)という行事では、お釈迦様の誕生仏の頭上に参拝者が甘茶を注いでお祝いします。これは、降誕(仏の誕生)したときに童子が香水を注いだという伝説によるものです。

誕生仏を安置する小さなお堂(花御堂)には色とりどりの花々が飾り付けられています。その時節に咲く花を「時の花(時花)」と言いますが、例えば弘法大師空海(七四〇―八三三)の「性霊集」には、

時華一掬、
讀一句、
頭面一礼、
丹宸を報ず。

(「性霊集」)

「山中何有(ある) 季節の花の一握りを供え、一句の讀(よみ)を唱え、頭を地に付けて礼拝して、恩に報いる」と見えます。わずかな行いであっても、仏さまとの縁は深まります。時花で飾られた花御堂を前に手を合わせ、感謝の誠を捧げてみてはいかがでしょうか。

「二花一香」という仏教語があります。仏さまに一つの花や一つの香をお供えする様子から「わずかな供養」を指します。「二花」は「二輪の花」ですが、「一つの花が咲いている時間は短いことから「ほんの一時」を表すようにもなりました。仏教語の「二花」には「仏さまの教え」「仏さまの現れ」という意味があります。「二花開けて天下の春」(わずかな花が



桜が舞い散り春が深まってゆく

開くのを見て春の訪れを知る)という言い回しがあります。可憐な草花の姿には、仏さまの大いなる教えが込められているというのでしよう。仏さまに花をお供えする功德については、次のような話があります。悉達太子(お釈迦様の出家前の名前)の妃であつ

た花色の女人の顔の表情は、生まれたときから花のように輝いていました。また、鹿母夫人という女性が歩いた跡には、いつも蓮華の花が開いていたと伝えられています。これらは皆、前の世(過去世)において仏に花を施してきた報いによるものなのです。

りながら、日々仏に花を捧げてきたのでしよう。表情も穏やかで、優しい言葉遣いを「和顏愛語」と言いますが、花への愛情と信仰が、自らも花のような姿へと変えていったものと想像されます。

花の香りを
しるべにて
無数の仏に
逢ひ見ざらめや
(選子内親王
「発心和歌集」)

(ただ一度の花の香りを道しるべとして、無数の仏に逢えないことがあるだろうか。きつと逢えるよ) 悟り(幸せ)への道を「覚道」と言い、仏さまに供える花を「覚道の花」と称します。春の花々が咲き誇る小道を歩きながら、無数の仏さまを心に感じてみませんか。一つ一つの花と会話をすれば、いつしかにこやかに微笑む自分に気付くことでしょうか。(栃木北部教区普濟寺)



火を渡り御加持を授かる



阿字門より道場に入る佐藤御山主



道場内四方を浄める宝弓の儀



柴燈護摩壇の壇木を伐り出す神斧の儀



燃え盛る柴燈護摩壇を囲む山伏たちの読経は周囲に響き渡っていく



諸願成就を祈り浄火を素足で踏みしめる、火生三昧「火渡りの儀」



人々の願いを御本尊様へ届けるため撫木を火中に投ずる



新型コロナウイルス感染症対策の為、一般の方々の渡火は人数制限させて頂きました

国土安穩・疫病終息祈願

高尾山 火渡り修行

三月十四日 於・自動車祈祷殿大広場



東京八王子南ロータリークラブ有志御一同様 佐藤秀仁貫首就任記念「遠山七条袈裟奉納式」

三月二十七日

三月二十七日、佐藤御山主が所属する東京八王子南ロータリークラブ（神山治之会長、古川健太郎幹事）の有志御一同がご来山され、佐藤御山主へ入山記念として遠山七条袈裟を御奉納頂きました。
遠山七条袈裟とは、青・緑・黄等の色糸を用いて遠山の景色を刺繍した御袈裟で、今回御奉納頂きました御袈裟の裏地には、「一心祈願・世界平和」と刺繍されております。

今回御奉納頂きましたロータリークラブに所属する方々は、高尾山と御縁が深く、当山筆頭総代の落合龍太郎様や当山参与の小松政見様、また大勢の方々が御山主が先達を務める高尾山有喜講に、参加されておりまして、

御山主は奉納式後に行われた記念法要に臨まれ、今回御奉納頂きました御袈裟を着けて威儀を正し、世界平和、国土安穩など諸願成就を御祈念されました。

東京八王子南ロータリークラブの皆様におかれましては、謹んで御礼申し上げます。



御奉納頂いた御袈裟をつける御山主



東京八王子南ロータリークラブの皆様

東日本大震災追悼法要厳修

三月十一日

東日本大震災発生から本年で十年を迎えた三月十一日、高尾山上において大震災による物故者の御冥福をお祈りする為、佐藤山主御導師のもと「東日本大震災追悼法要」が営われました。

当日は有喜苑に建立されている「東日本大震災物故者供養塔」において、未曾有の大津波や震災に關連して命を落とされた方々の、ご冥福をお祈り致しました。

午後二時の御護摩修行の後には、地震が発生した午後二時四十六分に合わせて、大本堂脇陣の慈照觀音御室前に於いて、僧侶と共に参列の皆が鎮魂と、被災地の更なる復興促進、また被災地の未来を守る方々へと祈る一時となりました。



東日本大震災物故者供養塔で被災者の冥福を祈念する

いけばなの心⑭

華道教授 佐藤 宗明

いけばなは四季折々の草木を見つめて、その美しき、生命感を表現していきます。そのため、お花が少なくなる秋や冬にも十分に楽しむことが出来るわけです。が、やはり、「春」というのは人間の心を明るくさせる力を持つています。いけばなもこの時期は若々しく、明るい感じのお花が揃います。

ただ、そんな時期でもきれいなお花だけを愛でるわけではないのが、いけばなの特徴です。今回の作品は『生花新風体株分け』です。柳で大きい器に釣り合うダイナミックな動きと季節感を表現してみました。そして柳の枝垂れてくる枝の動きと対応させるように、シマフトイで伸びやかにと瑞々しさを演出しました。

た。そうして出来上がった舞台にキラッと目を引く一点のお花を入れていきます。

池坊の伝えに「一輪にて数輪に及ぶならば数少ないは心深し」というものがあります。この作品も多くのきれいなお花を

生けるのではなく、本当に見せたいものを見定めて他を省略することで草木の生命感、美しさが際立つ様に制作をしてみました。実際にやろうとすると非常に難しい事ではあります。省略の極みを目指すのが生花の極みでもあります。

この連載も開始から一年以上経ちました。今後も色々な『いけばなの心』を皆様にお伝えできればと思っております。



花材・柳 シマフトイ ブラッサボラ（蘭）

オリンピック本番を控え

三宅義信さん来山

三月八日、ウエイトリフティング（重量上げ）の種目で東京オリンピック（一九六四）、メキシコオリンピック（一九六八）で金メダルを獲得された三宅義信さんが、春風吹く高尾山に来山されました。

三宅さんは、NPO法人の「ゴールドメダリストを育てる会」の理事長を務められております。今回は御護摩供に参列され、自身が指導する選手の必勝成就を祈願されました。

御護摩供の後、佐藤御山主と親しく面会され、今年開催が予定されております、東京オリンピックの成功と選手団の活躍のため、今後も頑張っていくとお話されました。



佐藤御山主と記念撮影

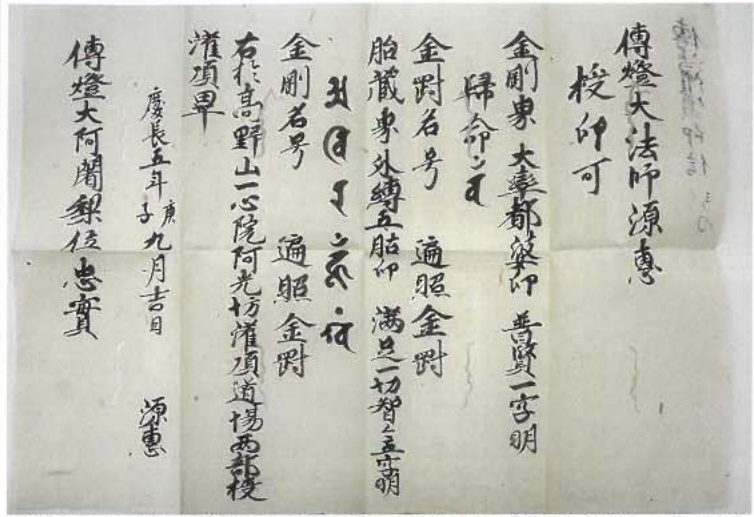
高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

16

九世源恵 空白の時代



九世源恵が高野山阿光坊で忠實から授かった印信(写真提供:法政大学図書館)

荒廢に瀕する高尾山をよそに、天下の形勢は着実に動いてゆく。朝鮮半島出兵(文禄・慶長の役)は豊臣秀吉の死を機に撤回。後嗣秀頼を補佐する五大老の中でも徳川家康がその存在感を増していった。慶長五年(一六〇〇)、家康は関ヶ原の合戦に勝利して對抗勢力の排除に成功、豊臣家の衰勢は明らかとなった。

九世源恵の帰還

天保四年(一八三三)の由緒書によると、その年、高尾山八世源實が隠居し、代わって源恵が住持を継いだことになっている。この年次は、恐らく源恵が授かった印信が根拠になっているのだろう。

慶長五年七月二日付、同年九月付で源恵が授かった数種の印信・血脈類が遺る。印信とは伝法の証書であり、血脈は師資相承の系譜を記したものである。この印信類を授けたのは忠實で場所は

高野山金剛峯寺の子院である一心院阿光坊。すなわち、源恵は一時期高尾の地から遠く離れた高野山に在ったことになる。

ここで、なぜ醍醐の系譜にある高尾山の源恵が高野山で伝法を受けたのかと思われるかもしれないが、当時において師資相承の關係は寺と寺ではなく僧侶と僧侶の關係であつたとされている。忠實から授かつたという血脈には醍醐寺開祖の聖宝や無量寿院開祖元海、中興後源の師とされる俊盛の名もあり、同じ真言宗という枠組みでの相承ということになる。

北条氏の滅亡から源恵が高野山阿光坊にて伝法を受けるまでの間、ちょうど一〇年のブランクとなる。源恵は忠實から数多くの秘法伝授を受けており、相応の修学の期間が考えられる。慶長五年より年次の新しい印信類はなく、恐らくその伝法を機に源恵は高野山を下り、高尾の地へ戻つたの

ではないか。これらの印信は写しである可能性がある。そうとしても原本はどこかに存在したはずである。薬王院文書に源恵ゆかりの文面が多く含まれることは、源恵の高尾山ないしその周辺への帰還を示唆している。

源恵の足跡をたどる

薬王院文書の中に源恵の足跡をたどると、その最も古い年次の史料は弘治三年(一五五七)十一月付の七世源智から授かつた印信となる。八世源實ではなく源智からというのは、続く永祿三年(一五六〇)の印信が源實・源恵の両者が授かつたものとされていることから、ともに源智の弟子であつたことを窺わせる。そして、八世源實が住持を継いだとされる天正五年(一五七七)付の源恵宛の印信の存在は、師源智亡き後、あらためて源恵との間に師弟の關係を結んだものと考えられる。これらの印信の伝世か

ら気付いたことは、薬王院文書における戦国・安土桃山期の印信類は全て源恵を宛所としたものであり、源實が単独で授かつたものは残存していないという事実である。つまり、源實以前の住持個人にかかわる文書は一切残っていないということになる。この文書の逸失の原因は前号で言及した安土桃山末期における全山の焼亡と推測される。この経緯から察せられることは、源恵が自らの印信類を携えて高尾山を離れていたがため焼失をまぬかれたということである。

しかし、慶長五年以降の源恵の動静は途端にわからなくなる。源恵在住時の年次を持つ史料としては、慶長一四年(一六〇九)付で幕府から高野山金剛峯寺衆徒中に宛てた、門首の選出は碩学器量に依るものとする書面の写し二通がある。これは後に寺院法度として集成される修学を僧侶の

本分とする幕府による寺院統制の一環である。写しであるので、後世作成の可能性もあるが、後々、忠實との相承關係は伏せられることになるのでその可能性は低く、その時点で源恵と高野山との関わりが継続していたことを考えさせる。

一方、慶長一八年付で修験の本山派・当山派の区別を厳にし、本山派山伏への役儀を禁ずる醍醐三宝院宛の書面も二通残る。これは、幕府が熊野系(本山派・天台)と醍醐系(当山派・真言)の修験を聖護院・醍醐寺を本山として編成する意図から発せられたもので、寺院の本末關係を支配の回路として利用する幕府の政策である。これについては、宝曆九年(一七五九)に写本を作成した関東新義真言宗法度と同年でもあり、同時期に写された可能性もある。源恵帰山後の情報は乏しいものの、この頃の年次の史料からは、

系譜の断絶?

話を源恵へ戻そう。先の文書の伝世から、慶長一四年段階に源恵が高野山との關係を維持していたことが、ひとまずは推測された。しかし、天保の由緒書が源恵の寂年としているのは、それからさらに一年後の元和六年(一六二〇)である。先の弘治の印信からは実に六三年を経過している。その印信を受けた時の源恵の年齢は不明なのだが、成年に達していたならば(当時十代半ばの元服は珍しくなかつたとしても)、齢八〇にならんとする年月である。

一〇世堯秀晋山の時期は由緒書の慶安三年(一六四八)遷化から在住二九年を(数え年で)さかのぼると元和六年になり、源恵の寂年と一致させている。堯秀が元和七年二月一四日に醍醐寺で伝法を受けているのは史実として確実だが、源恵と堯秀の子弟關係を示す史料は残っていない。逆に堯

秀の名は師である醍醐無量寿院堯圃との深い関わりを示唆している。

気になるのは歴代山主の墓域に源恵以前の墓碑が存在しないことである。墓碑建立の習慣が無かつたとも言われるが、住持の墓址自体が全く不明ということはどういうことか。ここまで来ると憶測の域を出ないが、やはり源恵の帰還時、未だ寺の再興の目途は立たず周辺に留まらざるを得なかつたのかもしれない。源恵に関わる文書も、後々薬王院へ持ち込まれた可能性が考えられなくはない。また、この時期の源恵による末寺大光寺開基の伝は何を意味するのだろうか。果たして一〇世堯秀晋山前後の高尾山がどのような状況にあつたのか。空白の時代である。

《参考文献》関口恒雄「解説二、寺歴・住職關係」『高尾山薬王院文書』第一巻、一九八九

高尾五丁目宮本囃子連 飯縄権現堂にて奉納囃子

三月二十一日、佐藤御山主の就任を祝し、地元の高尾五丁目宮本囃子連の皆様により、飯縄権現堂(御本社)において、お囃子と奉納獅子舞が行われました。若葉まつりなどでは、山麓ケーブルカー駅前で披露されておりますが、今回は初めて境内での奉納舞となります。

奉納舞に先立ち御護摩供においては、獅子舞の頭の部分である、「獅子頭」が御加持されました。



飯縄権現堂で行われた奉納獅子舞

春彼岸先師墓地参り

三月二十日



毎年薬王院では春秋のお彼岸の中日に、歴代の山主や僧侶の眠る先師墓地にお参りして、彼岸法要を行っております。

本年は二十日が中日となり、菅谷執事長御導師のもと、高尾山を支え、また見守ってこられた方々に思いを馳せ、静かに祈りが捧げられました。

お彼岸の期間とは春は「春分の日」、秋は「秋分の日」を中日とした前後三日間を合わせた七日間となります。

高尾山の昆虫

ドウボソカミキリ

四月の下旬位からアジサイ類の枯れ木に、ドウボソカミキリが出現します。

その名のよう
に体が非常に細く、体色は薄茶色で触角は糸のように繊細に長く伸びて、極めて特徴的な種です。

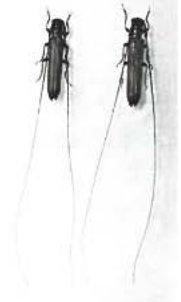
一見目立つ外見であり、個体数も少なくありませんが、枯れ枝と同化して見えるのが、ルッキンダで見つけにくいカミキリです。

そこで本種に確実に会おうには、ピーティングネットという、布と竹でこしらえた受けネットを下に置き、枯れ枝を棒で叩く手法が効果的です。うまく当たるとネットの上に次々に本種が落ちて来るので、感動的でもありません。

この四角形のネットを手を持ちいそうなアジサイを探しますが、高尾の自然研究路を歩いていますと若い女性のハイカーたちに「何を持っていていのですか?」と尋ねられ、「これは嵐なんです。」と応じると、興味深そうに「わざわざ上げるのを見たいです。」とリクエストされ困った事がありました。

今から思うと正直に答えてドウボソカミキリがネットに落ちるところを見せてあげた方が、彼女たちは喜んでくれたかも知れません。

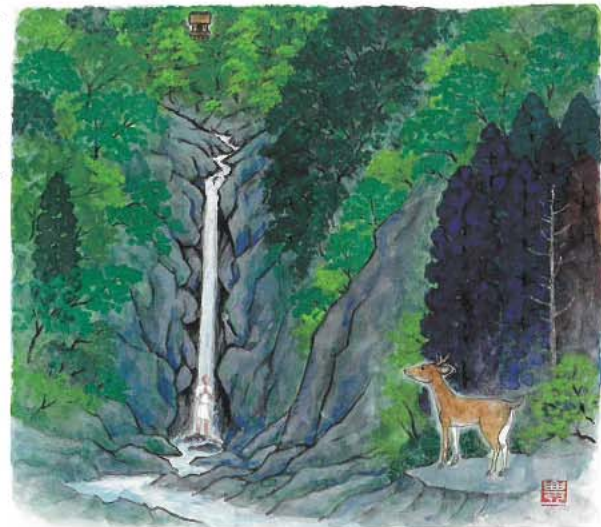
(標本・小畑 裕 撮影・文松島 孝)



高尾山物語 36

琵琶滝

絵・橋本豊治



古の琵琶滝道

平成十二年、山上の四天王門付近で、享和三年(一八〇三)に建立された、琵琶滝への道標が発見されました。その道標により、かつて四天王門付近から琵琶滝へ直降する道が存在したことが示唆されます。

高尾山麓のケーブルカー清滝駅前の広場から、駅の左脇にある六号路を進むと、不動明王を祀る本堂と共に、琵琶滝が見えてきます。

琵琶滝の名の由来は滝壺の形が琵琶に似ている、または、夜になると琵琶のような音がするなどの諸説があります。

修行場としての歴史は古く、具体的な史料に名前が登場するのは、江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』や旅行記の『高尾山・石老山記』などです。

史料によると、頭痛や病気に効験ある行場として繁栄していたことが分かれています。参籠堂が併設されていたことから、行者のみならず、一般参詣者が多く、そうした人々を対象として飲食や宿泊を行う茶屋がありました。

昭和の初め頃まで、二軒茶屋という茶屋が残っていたようで、現在でも琵琶滝道の途中にその名前が残っております。

史料によると、頭痛や病気に効験ある行場として繁栄していたことが分かれています。参籠堂が併設されていたことから、行者のみならず、一般参詣者が多く、そうした人々を対象として飲食や宿泊を行う茶屋がありました。



コロナ終息へ願いが込められました

日本画家・橋本豊治氏 三十三観音日本画展開催

八王子市在住の日本画家・橋本豊治先生が、米寿を迎えたことを記念して、「三十三観音日本画展」が本年の二月十八日(土)〜二十三日まで、市内のアート・スペースEIROにて開催されました。

橋本先生は高尾山とも御縁が深く、薬王院にも多くの絵画が所蔵されております。また、現在でも高尾山報に連載中の、『高尾山物語』の挿し絵を頂いております。

画展のテーマは新型コロナウイルス終息への願いを込め、様々な危難から衆生を導いてくれるとされる、観音像が展示されました。

観音菩薩の宗教

④

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子

(その3)

前号では百済の日羅が来日し、聖徳太子を観音菩薩として敬礼したとする『聖徳太子傳』(以下『傳』)の記述を見たが、今号では百済の阿佐が来日し、聖徳太子に面会する同書の行を見ざる。以下、その口語訳を書き下し文を○内に示した。

「五年丁巳夏四月、百済王の使の王子・阿佐たちが朝貢のためにやって来て言った。『この国にひとりの聖人がいらっしやると私は聞いております。私が自らお目にかかれれば願いが叶います(僕聞く、此の國に聖人有り。僕自ら拜観すれば意願足らん矣)』。

太子はこれ聞き、直ちに殿内に引し入れた。阿佐は恐悦して拝し熱く太子の顔を見た。また左右の手掌、左右の足掌を見て、再拜を繰り返した。そこから退いて庭に出て、右膝を地に著け、合掌恭敬して言った。『合掌して救世大慈観音菩薩を敬礼す。(太子は)妙教を東方の日本に弘め、四九歳まで法の灯を伝えられました。大慈大悲菩薩に敬礼します(合掌敬礼。救世大慈観音菩薩。妙教流通。東方日國。四十九歳。傳燈演説。大慈大悲。敬礼菩薩)』と。太子はほんの短いあいだ阿佐と眼を合わせると、眉間から一本の白い光を放った(太子、目を合はせること須臾にして、一白光を放つ)。

太子はこれを聞き、直ちに殿内に引し入れた。阿佐は恐悦して拝し熱く太子の顔を見た。また左右の手掌、左右の足掌を見て、再拜を繰り返した。そこから退いて庭に出て、右膝を地に著け、合掌恭敬して言った。『合掌して救世大慈観音菩薩を敬礼す。(太子は)妙教を東方の日本に弘め、四九歳まで法の灯を伝えられました。大慈大悲菩薩に敬礼します(合掌敬礼。救世大慈観音菩薩。妙教流通。東方日國。四十九歳。傳燈演説。大慈大悲。敬礼菩薩)』と。太子はほんの短いあいだ阿佐と眼を合わせると、眉間から一本の白い光を放った(太子、目を合はせること須臾にして、一白光を放つ)。

太子は左右の者に言った。『この阿佐は前世では私の弟子だった。故に今来て感謝しているだけなのだ(此れは是、昔身に我が弟子なり。故に今來りて謝する耳)。時の人は大いに不思議なことだと思つた』

ここでまた日羅のとき同様、聖徳太子は阿佐に礼拝され、救世大慈観音菩薩と呼ばれている最初の「五年丁巳」とは推古天皇五年のことである。西暦五九七年に当たる。先の日羅の来朝記事は「敏達天皇十二年(五八三)」とされ、太子が幼少時の出来事である一方、阿佐来日は青年時の出来事である。

向かい鄭重に礼拝して述べた言葉を通じ、『傳』は太子を観音菩薩と同一視していたことを伝えている。ここに小されるのは、太子が観音菩薩の転生者というより、観音菩薩自身であるとの見方である。阿佐の述べる「妙教流通。東方日國。四十九歳。傳燈演説」とは、観音菩薩たる太子が仏教を東方の日本に弘め、亡くなる四十九歳まで仏教を説くことを表している。

次の「大慈大悲」も無辺の慈悲を意味するが、特に観音菩薩の功徳を指す事が多い。聖徳太子の著書と伝わる『法華義疏』は、『法華経』「譬喩品」の「大慈大悲は、常に憐愍こと無く、常に善事を求めて、一切を利益す」を解説して、次のように述べている。以下に原文書き下しと拙訳を示す。

無く、恒に善事を求めて一切(衆生)を利益すること、すなわち義は上の長者が財富無量して、多く田や宅が有つて、諸の貧困を救うが如し、と」拙訳「法華経本文の大慈大悲より以下の文が述べるところは、(心の内の内徳に対し、)外に現れる徳(外徳)をたたえるものである。その本義は如来は大慈大悲があるの

原文「大慈大悲より以下は、外徳を歎ず。言うところは、如来は大慈大悲を以て常に憐愍こと無く、恒に善事を求めて一切(衆生)を利益すること、すなわち義は上の長者が財富無量して、多く田や宅が有つて、諸の貧困を救うが如し、と」拙訳「法華経本文の大慈大悲より以下の文が述べるところは、(心の内の内徳に対し、)外に現れる徳(外徳)をたたえるものである。その本義は如来は大慈大悲があるの

異なる解釈が伝えられている。その理由は、四天王寺が重んじられる『日本書紀』の記述と法隆寺系の『上宮正徳法王帝説』との記述が異なることに淵源する。それによれば、『日本書紀』は太子の薨去を推古二十九年(六二二)年二月五日と記した。しかし法隆寺はそれを認めず、推古三十(六二二)年二月に聖徳太子と膳王后がともに病になり、二十一日に王后が、二十一日に聖徳太子が亡くなったと反論した。その際、法隆寺が根拠としたのは法隆寺金堂の釈迦三尊像光背銘文である。これに対し四天王寺もまた法隆寺の所説を決して認めようとせず、久しく『日本書紀』の記述を継承している。四天王寺の主張を今日に伝えるのが『傳』である(吉田彦編「変貌する聖徳太子」所収、吉田彦「聖徳太子信仰の基調―四天王寺と法隆寺―平凡社

二〇二一年)。「傳」は太子の薨去を次のように述べる。以下、現代語訳とともに○に漢文書き下しを示す。

「推古天皇二十九年辛巳春二月、太子斑鳩宮に在り。太子は妃の膳大郎女に命じて沐浴させた(妃に命じて沐浴せしむ)。太子自身も沐浴し、新しく清い着物を袴を着て、妃に次のように言った。『私はきよの夕方死ぬ。あなたも一緒に死ぬであらう(太子もまた沐浴し、新たな清潔き衣袴を服して、妃に語りて曰く、吾今夕遷化する、子も共に去るべしと)。妃も同じように新しく清い着物を袴を着て、太子の横に寝た(妃もまた新たな清潔き衣袴を服し、太子に副床して臥せり)。翌朝、太子と妃はいつもまで起きなかつた(明日、太子并びに妃、久しく起きず)。左右の宮殿の戸を開けると遷化なさつていたこと

がわかつた(左右に殿の戸を開くるに乃ち遷化せることを知れり)。その時太子の年齢は四九歳、或る説すなわち法隆寺などがいう壬午の年というのは誤りである(時に年四十九、或説の壬午年は誤りなり)。

「傳」は、さらに太子の遺体の超人性についても述べる。

「その(遺体の)容貌は生きていようであった(其の容、生くるが如し)。その身体は非常に良い香りがした(其の身、太だ香れり)。太子の遺体を持ち上げると衣服のように軽かつた。妃もまたこれと同じであった(太子の屍を舉ぐるに軽きこと衣服の如し。妃も亦これと同じなり)。

「視其貌如平生、體亦軟弱、舉屍入棺、其輕如空衣」と対応するとされる(太子の屍「本朝神仙伝」と往生伝)『国語国文』5710、一九八八年)。

「傳」における太子は死後も超人的であるが生前もまた上記に見るように眉間から光を放つなどの神通力を有していた。さらにここでは太子は自分の前世を知っており、阿佐が前世において太子

の弟子だったと述べている。これは太子の前身を種々に展開する根拠となるもので、実際、太子は多くの人物の転生者と説かれるようになった。のみならず江戸期の仮名書き『聖徳太子傳』では、過去六世生まれ変わりの後、今生は本地の観音の垂迹とし、二百七十年後の来世の転生も予言するにいたつた(杉本好伸「聖徳太子伝」国書刊行会、二〇二一年)。



法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘(拓本)。飛鳥時代。国宝。聖徳太子の没年ほか、造像の理由などを伝える。

菩提樹
ワイルヘルム(ミナリ)
(漢訳・菅井一雄)

菩提樹立門前泉
我思甘夢書幹前
逍遙寒夜風雨響
此地有總聞神宣

厚木市 荒井 一雄

民族と
宗教のらがひのり、へて
平和菜かん、の地球上に
門の前の泉に立つ一本の菩提樹…
我は甘き夢を思ひ、
その樹の幹に書す…
逍遙(さまよひ歩く)寒夜、
風雨の響き…
「此処に總ひ有り」と
神のお宣げを聞く…

高尾山には、日常的に登り続けてきました。きつかけは三十代の頃、レーストレーニングと、ギャンブル離れの二環として始めました。

六十代からは健康登山と腰痛対策がメインです。また、若い頃には特別と感じなかった、時季の草花を健康登山の皆様にお教え頂き、癒されております。

最近登山をしている途中で感動をうけたことは、蛇籠道をきれいに清掃されている、健康登山者の御夫妻です。山道の落ち葉を払い、土も掃き清めておられますが、何しろ蛇籠口から十一町茶屋までの、およそ一キロメートル程の登山道全てのことなので、驚きです。

更には、自然を損なうことなく清掃されているので、また驚きです。



折り折りの記 (140) 波多野 重雄

マンサクの花の咲きそむ高尾山

早春、山で花が一番先に咲く「先ず咲く」から「マンサク」になったといふ説と、黄色い花が枝一杯に咲くことから「万年豊作」に由来するといふ説がある。

昔から農業は気候占いに依存し、満開かちよぼちよぼ咲くかで、その年の豊凶を占ったという。縁起の良い名を付けたのである。

寒い頃に山に登らないと見られない。木は淡黄色で強靱、然もしなやかで折れない。また樹皮を集めて、「縄」の代用に使ったりする。

燃料の薪を縛ったり、筏を編んだり、河岸工事の蛇籠や炭俵の輪型に使われる。飛騨の白川郷等では、釘を使わず丸太を縛るのに使われた。葉にはタンニンが含まれているので、止血剤に使用される。

(高尾山健康登山の会会長)

健康登山者投稿

蛇籠道の清掃者

八王子市 黒田 日出夫

ご夫妻のお友達から、三時間も清掃されているとお聞きしたので、ご本人にお話を聞かせてもらったところ、「枯葉の下の小石に躓いて滑ったことがあるからなんだ」と謙遜されておりました。

高尾山では、大勢の方々があらゆる場所で清掃活動をされておられますが、こんなに長時間かつ長距離を、マイほうきで掃除されているのは、初めての見聞です。

私が歩いていて出会った登山者の皆様方が、あまりの綺麗さにビックリされ、京都の神社仏閣のようだとか、修行僧が清められているのだからか等、話しかけられることがたびたびあります。

ぜひとも皆様も蛇籠道を散策して、ご体感ください。

左の絵手紙は御主人の清掃姿を、奥様に横写して頂きました。

健康登山者投稿作品
季節の絵手紙「春をはこぶ」
八王子市 梶谷玲子 様



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九十九段 **枠にとらわれず自由に考える**

常識というのは、ある人が属する国や地域、社会や立場、経験によって異なるものです。自由に考えると案外難しいもので、自分が持つ常識以外の考え方を学ぶということが、新しい発想につながることがあります。

は 敗者となりて多くを学び 努力重ねて勝ちにゆく

何事につけ、失敗や敗北はとも残念な事ですが、ただ単に「悪いことがあった」だけで終わらせないようにしたいものです。

敗北は必ずしも終わりを意味しません。諦めることなく失敗に至った過程を検証し、原因を反省することで、多くの事を学び、失敗してしまっても対処できるようにあります。

いずれ訪れる次の機会を窺って、試行錯誤を積み重ね、いつの日か挽回して勝利できるよう、努力を怠らないことが大切です。

高尾山 季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
「あしはじめてしようず」
四月二十日〜四月二十四日頃

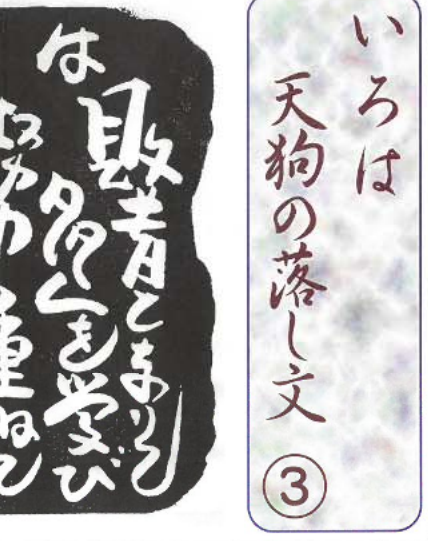
「葎」とはいわゆる「葎」のことです。「アシ(悪し)」という語感から、「ヨシ(良し)」とも言い換えられます。

日本の古名の一つに「豊葎原(トヨハシノハラ)」とありますように、日本各地の水場に自生しており、すだれや笛の材料等に使われてきました。

今月の風物詩 **桜餅**

桜の葉を巻いた和菓子で、関東風と関西風の二種類あります。あんこを小麦粉で焼いた生地で巻く関東風の「長明寺」と、道明寺粉(モチ米を加工したもの)を蒸して餅を作り、あんこを包む関西風の「道明寺」があります。

全国的にみると道明寺の方が主流となっています。



おはなし散歩道

消えたスニーカー

八王子市 池田美絵

ゆか子は、ピンクの生地にワンポイントで、シルバーの星形がついたスニーカーが大好きでした。この靴を履くと、どこまでも走っていけそうな、ごきげんな気分になるのです。

ある朝のこと、ゆか子は「このスニーカー洗って」と、おかあさんに頼みました。でもおかあさんは、すり減っている靴底を見て、「四年生になるんだし、新しいのを買ってあげる」と言います。「いいの、好きなんでも」とゆか子が言い返すと、「はいはい、洗っておくわね」とお母さんは応えてくれました。

スニーカーきれいななったかな...ゆか子は楽しみな気持ちで学校から帰ってきました。ところが、庭先に干してある

スニーカーが片方しかないのです。

「おかあさん、片方しかないー」。ゆか子が大きな声を出すと、おかあさんが家の中から出てきました。「あら、確かにこの下に立ってかけておいたのよ。おかしいなあ」。おかあさんは、物干し台を指さして首をかしげました。ゆか子は今にも泣き出しそうな顔になりました。それほど好きだったので。

「カラスがくわえていったのかも。探してくる!」。ゆか子は駆け出しました。しかし家の周囲を探しても見当たらず、それなら近所の家の庭に落ちていられるかもしれないと、フェンスの外からのぞいたりもしました。だが、ピンクのスニーカーはどこにもあり

ませんでした。「カラスが川に落として、流れて行っちゃったんだ」。絶望的な気持ちでゆか子は家に戻りました。

おかあさんは、ゆか子があまりにもがっかりしているのので、「もう一度探そう」と言って、二人で近所を探しましたが、やはりどこにもありませんでした。もうあきらめるしかない。ゆか子は残念な気持ちで、片方になってしまったスニーカーを靴箱にしまいました。

一週間が過ぎていきました。窓を開けると、沈丁花のやさしい香りが漂ってきます。派手な花姿ではないけれど、春の訪れを感じさせてくれる沈丁花がゆか子は大好きでした。その香りに誘われて、沈丁花が植わっている庭の隅に行ってみると、つぼみがほころんで薄ピンクの花がところどころに咲いています。「あ、いい匂い」。ゆか子は大きく息を吸い込みました。



その時です。沈丁花の植え込みの奥に見慣れたものが見えました。一度はあきらめたピンクのスニーカーです。「ここにあった!」。ゆか子は思わず手をたたきました。

入り組んだ枝に顔をつつかれないよう、慎重に手を伸ばしてスニーカーをひっぱりだすと、靴の中にミミがいつもじゃれまわっているネズミのおもちゃや、おかあさんが手芸で使う毛糸玉が入っています。さらには、カナヘビの死がいもあつた

りして、ゆか子は驚いて

スニーカーを落としそうになりました。

ミミとは家で飼っている三毛猫のことです。「大切なものをかくしていたなんて、ミミもこのスニーカーが好きなのね」。ゆか子はくすくすと笑いました。

そして靴箱からもう片方のスニーカーを取りだすと、沈丁花の木の下に並べて置きました。「これからもしまっていたよ」。ゆか子は窓際で日向ぼっこをしている、ミミに声をかけました。(挿し絵・小出 茂)

高尾山報助成金志納者御芳名順不同(敬称略)

Table listing donors and their amounts, including names like 高崎市, 柏市, 横濱市, etc.

退山のお知らせ

非常勤職員・参務

芳澤秀海

非常勤職員・参務

渋谷秀芳

令和三年三月二十日をもって退職致しました。永い間お疲れ様でした。

大本山高尾山薬王院

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十一丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、不動院から琵琶滝を經由して薬王院まで歩く B、ケーブルを利用する。

日程 五月十一日(火) 行程 山麓不動院↓琵琶滝↓仏舍利塔↓本堂(護摩修行)↓坊入(昼食)↓下山(一号路)↓不動院着(全法堂)↓解散

参加費 五千円(昼食代、保険料含む)

集合場所 山麓不動院(八時半集合)

締め切り 五月七日(金)

八王子市高尾町二七七

大本山高尾山薬王院 八十八大師係

*申し込み締切り後、請け書(行程表・持ち物等)をお送り致します。

*尚、新型コロナウイルス感染症の状況により行程等に変更がある場合があります。



登山だより

■五月行事日程■

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

九日、二十一日

弁天様御縁日

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

十日、二十五日

御詠歌勉強会

(十時山麓不動院)

十八日

高尾山天狗まつり

二十二日

月例写真会

(十三時山麓不動院)

三十日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

二十一日

飯繩様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

二十八日

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯繩大権

現様の日々の御加護に感

謝し、沢山の御供物を捧げ

て御本尊様威光倍増の為、

御供養申し上げる法要で

す。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し

出下さい。

尚、法要終了後に百味の

お札を授与致します。

毎月二十二日午前九時勤修

御志納金 一口三千円以上

毎日の お護摩奉修時間

(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分

// 9時30分

// 11時00分

午後0時30分

// 2時00分

// 3時30分

ご講中・団体等御相談
下さい。

特別精進料理

「そば御膳」のお知らせ

本年も毎年ご好評を頂いております、「そば御膳」を実施しており、旬の食材を生かした料理を気軽に味わっていただけます。

ご予約を承らず御案内しておりますが、食材に限りがありますので早めの来山を御願ひ致します。

期間 九月下旬まで

営業日 不定休(団体予約多数の場合はお休みを頂

きますので御了承下さい)

価格 千九百円

※ただし、四月二十九日～五月五日の大型連休期間につきましては、価格や実施日等が変更になる場合がありますので事前にお問い合わせ下さい。



特別精進料理「そば御膳」 1,900円

(11:00より受付開始)

※営業日の詳細につきましては、ホームページをご覧ください。

※料理の内容は季節や仕入れにより変わります。

◆お知らせ

高尾山薬王院では、新

型コロナウイルスの感染

予防を図る為、境内各

所への消毒液設置・換気・

職員のマスク着用などの

対策を実施しております。

御来山の皆さまにおか

れまして、手洗いや咳

エチケット等の予防対策

情報に十分留意されます

ようお願い申し上げます。

高尾山報助成金

御志納のお願い

当山では、大護摩修行や星祭り等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。

引き続きご愛読され

ますよう、皆様方の助成

金御志納をお願い申し上

げます。

高尾山薬王院ホームページ
<http://www.takaosan.or.jp>

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円